中村俊定文庫
文 庫 18
578

古今集誹諧歌解

全

京都帝国大学図書

古今集詠諧歌解

東花坊撰

京都帝国大学文学部

詠は俳の字なるを。なだらかなる草字の相似たれば。詠となれるなるべし。俳はたはふれ也。諧ハ文心雕龍に悅笑也。前漢、叙傳に。絳、諔、諧倡、優。晉書顧愷之傳。愷之好諧謔とあり。諧もたはふれ也。堯山堂外記曰。張文成工為俳諧詩賦とあり。唐にても俳諧の詩あれば。即日本にても此說を用てたはふれたる哥の躰の名とせられたり。粤儀抄にはこれを滑稽に成そうくらる。滑稽は王道にあらざれ共。如義ありて。時に用あり。佛法よりも是あり。戲

関を先として人の心を悦ばしめて引て道に入らしむる。鎌足の戯。たはむれのたはふれの事。用に立たる如し。聖人だに戯あれば誰かよりて〳〵たはふれの事ふらん

八雲御抄にこれハいかなるをいふにかあらん。まさしきやうしれる人なしと。ことむつかしき事ハ註せさせ玉ふ。愚案此哥作者みづから俳諧哥をよまんとてよめるに非ず。貫之の哥ども撰せられし時。たはふれたる哥を別にとり出して俳諧躰と名目をたてゝのせられたる也。

定家卿の遺書に云。古今の詠俳哥ハ相傳の人全くなし。

公任卿に御堂関白殿の問玉ひしかどもつるに初して知らずと答へられけるとかや。家の重事古今の大事この事也。これも申せば世にやすき事也。人毎にこゝはいかいをば狂哥とばかり心得侍るほどに。小知のさまたげにて至極をしうめなるべし。凡そさやうには聞えながら心得かハるふしはべるべし。はいかいと申す時ハ。利口なるものをもさむきたる心なるべし。心あきとのに心をつけ。ものいはぬものにものをはいはせ利口したるなるべし。神すべき事也。今案にかくあればこと〳〵しき大事也。さまでの大事の哥を。古人ハ何として俳諧と名

つけりるぞ。ものいはぬものにものをいはするハ常の哥もしかり。佛像に限らず。詩哥のならひ也。たゞ佛像をのみ思ひて。常の哥のつねにかくの如くならん事をおそれて。つゝみおく事といはゞよかるべし。この佛像の内にはいかいめかぬ哥もあれば。かゝる所をよく知らん人は。是を神事として みたりに人にかたらず。畢竟ハ是を知らでも哥の道にこゝとをかゝぬ事なればなるべし。

八雲御抄にの給へるハ。唯哥ハ艶にやさしくよむとの(しう)おぼして。説をはたゞまハぬにこそ。分位卿も定家卿の心なるべし。もとよりこの哥きこえかたさとのちんば惜みて

神せられたるならむ。

佛像哥ハ詞をたくみによめれば。常の哥よりハ面白し。もし人こゝろこゝこのみてよまば哥のさまはあしかるべし。然れ共又多よむうちにはかゝるさまの哥もなどかよまざらん。今の俗に狂さ(きょうさ)れ哥とハ又自ら体制のことなれば。すこしく哥よまんものたれか是を慢(え)ずへけん。

扇が輩云ところの佛像ひそゝ(ささ)に出たり。故に今此哥のうちに佛像ある歌を拳て。門に遊ぶ人にものがたり侍らしよしよく吸(えみ)味すべし。

題しらず　　よみ人しらず

梅花みにこそきつれ鶯のひとくゝといとひしもをる哥の心は花ハ梅花こそ見に来れ。鶯にかまふ事ふきに。我をおそるゝハなにごとぞとゝ。鶯をしかりたる所俳なり。

素性法師

山吹の花いろゝ〻ろ〻ぬしやたれと（とこたへぬくちなしにしてくちなしとゝを人のにのあさといひなしたるが俳也

藤原敏行朝臣

いくばくの田をつくれば か部公しでのたをさを朝な〳〵よぶ

しでのたをさとハ郭公の一名なりとふるきものにしるせる。部公ハしでの山より来りて農をすゝむる故にしでのたをさといへり。此説によればしでのたをさを部公の一名とする事たしかなる證もなし。万葉に見えず。もしふるくより一名とせば。万葉に部公をよめる哥いくばくをゝとをゝをしらず。稜ゝよよめれば必よみ出すべき事也。たゞいゝ伊勢物語にあたり。今その哥ゝ敏行の哥なれば。業平同時なれば詠するにたらず。伊勢物語の哥はかけ哥ほとゝぎすをよみしゆゑ。しでのたをさにほとゝぎすをそへてよめるなり

。それゆゑ庵り　あまたの詞あり。これによりておし
て言へバ。農人を云詞なり。俵馬巣に。妹が門やせなが
門。行すぎかねて我行バ。ひら笠の。ひら笠の雨もやふら
なん。しでの田長。雨やどり笠やどり。やどりてまかうん
しでの田長。とあり。詩経に田畯を昔の吳に田をさ
とつけたり。田をもちて作るものなり。しでハ鵙の
字にて。しづと同しきか。いまだ之あたらず。然ハ昔
此哥俵馬巣なれば方言俗語あるべし。りて石をいづ
しと云。秀づるをひいでるとも云へバ。しづをしで
と云まじきに非ず。しからば古農人をしでの田長と

十行　廿四字高

云ける歟。哥の心は。ほと、ぎすハ苗を植る比より
夏秋かけて啼もの也。このほと、ぎすハいかほど田
をもちてつくらするやうん。朝ごとに来りなきて。農
人を呼たて、田をつくる事をすゝむるぞと云へるな
り。部屋の戸をもてると云所佛なるべし。栄雅朝に
もこの俵馬巣を引てこのいくばくの哥も。しでの田
をさと同じ心なりけり。俵馬巣の哥にハほと、ぎ
すくゝきゝ寄てなし。

七月六日たなばたの心をよみける　藤原かねすけ

凡たなばたは織女に限りていふ詞なり。然るに此哥

牽牛（けんぎう）の哥とみえたり。詞書たかへるに似たり。されどたなばたとゝをセタの心にして。すべてゝゝるにならりきたりてかく書たるか

いつしかとまたくゝをはきにあげてあまのかはらをけふやわたらん

またくゝまたきせ。またきハかねてせ。兼て逢んいつかあいんと思ふゝなり。セヨをすちゆゝゝにもすそをはきまでかゝげて何をわたるならんとせ。はきにあげとゝと又セヨに逢なるをゝゝにあはするが似なるへし

題しらす　　凡河内みつね

むつごともあだつきなくに明ぬめりいつらハ秋のゝゝがしてふよハ

七夕の朝の心すてこゝにのせたり。いつらは秋ゝゝゝり へる所侭せ。むつごとはむつみしたしむ詞なり。又むつ事とゝゝなゝゝば男女交合の事せ。この哥侭なゝゝばむつことにてもかなゝゝへし。いつらハ秋ゝゝは事の哥にもよむへし。

傳　二通　照

秋の空になりあきたてる女郎花ゝゝゝかすし花も一

とき

なまめくは早くきこへんとならば色めくせ。凡そなまとはやはうかにしなやかなるを云詞なり。あなかしかましはあまたものいふをのみいはず。女郎花の両方へ立なら〻べて女の色をてらし籠をあらそふに似たるを。あなかしましのさまや。花とみゆるもたゞ一時の事ぞとおしふる心也。是等の哥体とみゆるところなし。あまめきたるなどならんか。然るに女郎花の哥秋部にあまたありていつれも女子にしてよめり。

よ2人しらず

秋くれば野べにたはるゝをみなへしいづれの人かつまでゝ見るべきし

たはるゝは女郎花のさきたるを女とゝよりたはるゝと云。これ又色めくさまなり。つまで見るべきとは人をつみて思ふ事のよしをしらするを摘にかけたり。女のはだを指にてつむ事。男のざれてする事也。これを併とす。沿容誨淫(ヤウクワイ)の心にて女をつましめたり。

秋霧(ラヤムハカタヲヨレエハイシ)のはれてくもれば女郎花はなの姿ぞみえかくれす

女良花を女子にしてよめり。女の人にみえたくもあり。又恥かしくもあるときのさまをいへり。又立がくれするとき花にいへる所似なるべし。女の人にみらるゝを恥るハ本心にてよければ。上の哥に反してよめるこゝろなれば。かくつゞけたり。

花と見ておらんとすれば女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ。

うたゝをかたてと通じていへり。日本紀に奇偉と書り。はなやかなりと見て折んとすれば。たけもたかく。枝も長くひろごりて。奇偉なるすがたにて女郎

花といふハたゞ名のみと云こゝろにや。それならはやさしくよむ女郎花をわつかに言なす所似なし。

定平御時きさいの宮の哥合のうた

在原むねやす

秋風にほころびぬらし萩ぬいりさせてふきり〳〵す鳴

古き物ゝハ蕃をさせといふ。それゝ ついりさせとつゞくるなり。ついりさすといやふれたるきめなどをぬひさしてつゞくるなり。其させに蕃をかけ。させとゝづけたる蕃の鳴なり。歌注にも蕃のついりさせと

鳴はあらずといつり。ほころびは花のさきたるを云。こゝはやぶれたるにとりなして破れを縫ついるとゝか俳なるべし。嫩婦をいましめたり

あす春たゝんとしける日。となりの家のかたより風の音を吹こしけるをみて。そのとなりへよみでつかはしける

清風ふかやぶ

冬ながら春のとなりのちかければ中がきすりぞ花は散ける

隣家の人徳あり。文才ある人ゆゑ。かゝよみをくれるならん。冬と春との中垣なり。中垣より花の散といへる俳なるべし

よゝひとしらず

題しらず

いろのかゝふりにしこひの神さびてたゝるに我はいねぞかねつる

拾遺にふたゝび入たるは落句子ぎぞかねつるとて作者義孝忠房なり。いそのかゝハふりにし恵といはんためながら。神さびていわれをかけたり。万葉にはふりたる事をかみさぶといへり。物のふるきハ精霊ありてたゝりなすゆゑ其心にいつり。吾年ひさしくめないぬ恋のあすりにふるくこうをへたる神のた

ゝりをなすやうゝ。夜も日のあハぬとて。詞ハ佛なくて心か佛なり。まことにすかしくされて言へる

と。

枕より跡より恋のせめくれば せんかたなみぞとこふかにをる

夜ふかなる床のあとさきより恋と云やつこのせめくれば。せんかたなくて床の中にいぬるとて。是も哥の心の佛と

恋しきかたり方こそ有と表けたてれを絶せなきいちりあ

こひしきかハ恋しき哉と。哥恋しき人の方い五あハ

ぬにてこそあれ。そと方の知ぬ人ありきとき〳〵と。

表は立ても抜ても心のうかれて無ごとしと。下の句

ゐたてれをれと詞を重る故ゐ。上の句に方を重てつ

りあハせたり。哥手の哥に共称多し。是らハいかゐ

ゝ佛なゝん知られす。

ありぬやと心之かてらあひみねばたハれにくきしてそ

恋しき

相みねば命も危きやうに云なゝハせバさもあるべし

やゝみかてらにあひみすして居れば、まことに命も

あやうさばかりなり。此事戯にこいろとんとてせし

かゝ実に命もたゆべけれは。かゝる戯ハかりにもすま
じき事なりと思ふ程のこゝろしさなりと。心の仏なる
べし

ゑゝなしの山の口なし之てーがな思ひの色のしたぞめ
にせん

野註におもひを思ふ心まて。耳なしは人にきかれじ
になし(ハ)にかくといはれじとゝ心也とゝおもひ
の色とはおもひのひに紺をもたせたり。紺の下染く
ちなしを用る之。哥の詞も心も仏之

足曳の山田のそほづをのれさへ我をほしとりふうれは

しきを

此哥下心にハ僧の色を好めるをそしれり。哥のたゝて
ハ呂つやしきものゝ高位の人をこふるにいひあせり
。そほづい葉草(くさ)にて人形をつくり破笠(やれかさ)をきせ。ゆり
なる弓矢をもたせ、田の中におきて鳥ををとすもの
せ。後にかゝしと云。雨露にぬれそほつしの中忍そ
ほつといへり。我をほしい我を欲(ほし)する之。われを恵
るなり。うれいーきハ俗にいふきのどくなる之。哀
きものに恋らるゝをくるゝーく思ふなり。うれハしき
事と云心なり。(そ)ほづに僧都をふくめ我をほしに恃帥

をもたせたり。是を例とす。僧い後世に木の謡の如くといへると同じくて、かゝしのめさまなるものゝ。美女麗人（びじょれいじん）を恵る事のにげなさをそしりにくむなり。古帖にへ今しなをてらゐにたてるそほつかぶ紙はてぬべきよとはみながらとあり。そほづを僧卵にとりなしたる詞て

きのめのと

ふじのねのなびめ思ふもえハもし神たるけたぬむな

煙を

富士山の神も恵のこゝをやめ玉ハぬを例とす。それハ

人のいのり（恵）てもならぬ恵をするをそしるなり。それを神（しんオ）にしてゝ云へる。神にしする少ゐ上の僧をそしれる哥となくべきなり。富士のねの五もしハ

のりに下の句の上ゐおきて之る。もえハもえとハもえどもえどもと云ハなり。言を重ねたるなり。

。もえハもえとゝやうにて下知するに水す。凡りへの家を下につくりけば下知の詞（そえ夏）なる。之。言へ食へと云歟也。このもえの之ハ添吹と同じく。其詞に之来もれる之の詞て。沽之に添えよ。吹えよといはねば下知となす。哥のこゝなりぬ思ひの火にいたもえ

にしゆるばかりなるを。其人の思へるやうハ、富士の山の神さにむなしき烟を常にたてゝ仙山事のなるべなれば。我ハ人なればさあるべき事とて、なし烟に胸の烟とゝをそへたり。しかるにへうはやふ和も思ひのなれば、こそ世をへてあづの山ももゆらめといへるハ、仙門とせず。これハ人の思ひを山にたとへたるまでなり。故に常ず哥の通例なり。こゝハ富士に実に恋の思ひのあるにして人の上にそへたるゆゑに仙とするならん。

きのあつらも

あひみまくほしハかすなく有ながら人に月なゝまどひこそすれ

あひみまくほしうおもふ心ハかずかぎりもなくありながら。人にあゝべきつきのなきに思ひまとゐとゐハを。星と月とによせてよあり。つきなしとなことわさにもいふ事也。便宜あさなり。家注。星のかずあく多き夜ハ月なけれハ。月なみといひなせり。星ハすなく人に月なみの詞仙なるべし。

小野わ町

人にあはん月のなさにハ思ひきてむねハしりびにハやけをり

野注には月のなき夜はとあり。思ひおきていつきなき事を寓てより思ひおくといふに。おきあたるをそへたり。胸はしりびとはむねのさハぐをはしるといふ也。それを走り火にそへてにゆくとハあり。すべて心のさハきあどろくハ気火気のする所なれバいつり。思ひおきていふ思ひのおこるとゑるし。しのれバ火のおこるごとき也。火をおきるもこれより也。やけをりいやけたる也。焦るといふにハあらじ。胸はしり火など似ならん

寄手御時きさいの宮の亭会のうた

春霞たなびく路一の若水なほも成みてしがな人とつむやと

藤原おきかせ

霞たなびく路辺にハ人もあそびなくさむところ也。そのわか菜になりたるバ人につみはやされてかくれに。今ハ年よりて人につまるる身にもあらずと也。つむハ菜を摘るとそふに人に若はたをつめるハをそへたり。よるにありけりてある也。人につめさせられたるとゝかに似なり。

よみ人しらず

思しらず

思へども猫とすれば
ゆへば

彦に何事にすれ共なんにかゝる人とかも。人の心ばせを露にたとへて。いひかゝる所の人にかゝり合ふあしへば。心にくゝ思ふ猫とすれいやあとまり。いつ小の法ゝとまるゝ所にとゞまる。思へども猫といふ所にあらひ難し。伊勢物語のうとまれず思ふものゆゑといつるゝ同じ。この哥かゝるとゝを信意にとりたる仰とすべし

十首 中四句

平貞文

君のゝのしげき草葉の妻恋にとびたつ雉のほろゝとそなく

しげき草葉のつま恋といふ雉あにとすせてよめる恋の哥なれば、妻恋のしげきにしげき草葉といよせたり。ほろゝとそなくゝ雉の聲にすせてほろくと侯のこゝろとといつる仰也

きのすしひと

秋のゝに妻なき鹿の年をへてなぞ我恋のかひとぞ

鳴

雪鹿恵のいなり。庵のなく聲をかひよといふ事
いかなるいそぎぞし。かひよとぞなくと云を仏とせ
るなるん。

蟬のはのひとへにうすき夏衣なれば夏なんなりにや
はあらぬ

夏衣はうすきゆへ蟬の羽のごときひとへといへり。
たてぬきの絲のなみよるもの也。それを身になれ
てきるなら絲のすき合となり。我にうすき
人なれそ。ひたすらになれもつすしくだにせばゆす
我にすきうものもとなり。なれい裏の字なるへ

し。なれいすなんといふ仏なるん。

たゝみ

かつ小ぬのしたすりあるわぬないのわぬないたゝじ
くるなといひそ

おくれぬのしたすといふるにしのびくのいさあ
くめり。やあなにをうけてそもにわぬ君が名は
ふたゝじ。せのてい我心やりにわはひくるをだに
いとはでめよはせよと也。わぬないゝ葉(いと)なり。くる
といふはなはの縁なり。来るをないとひそなり。女
と共にねてこそ名の立
寝(ね)すに名の立た

はなきほとに。しきりに来るのみをいとひ玉ふな。

ねぬなはたいじといへるハを俤とす。

よみ人しらず

ごとならハ思はずとやいいひはてぬなぞ世中のたまだすきなる

題注たまだすきとハかけたるうたにいひよせなり。

中くおもはずといひきらいよりるべきを、かけたりとも。万葉に玉だすきかけわばくるしかりたゆハずつきてみまくのほしきを思ふも。ごとなくハ如氏なくハ他のごとくきたれども。おとりあをいへり。如此

なりハ一向にいなといひはたすかすしといへるを俤とするか。

思てあ人のハのくまごとにたちかくれつゝみるもしかな。

くまとハ曲の字なり。ハのくまはハにかくす所あると道のくまによせてうへり。われを思おとろ人の言まことしなわば人の心の曲にあく小屋へ、座宮をみなとも、此小なるへし。

思一ども思はずとのみいあなわバいなやあもハじおとろあひなし

古帖にいなやおもハじを今いあもハじと書り。五い人を思へどもそれをハはまことゝせずして思ひいせぬといふなれバ。今ハはいにいなみて思ハとおとゝかひなしとも也。この哥俤いづこなるん。古帖のごとく今ハなれバよくきこえたり。いなやにて い同えかな。いなとハいなもいとも、こゝいも先ず言がくるるもなけれバ。いなもるいなし、いなわとゝにはバず、もしくい下の哥にもあるいでやなるべきかいでやなれバ思ハぬとおゝあてに言ひけすなれバ、さらバ思ふ事をやめんとゝろなり

我をのみ思ふといはバあるべきをいでやハのおほめさにゝて

君が家を思ふと云ながバ。哥はありにてあるべきを。さもえぬなりといふをふくみて。さらバ女のハは大都のごとくひく人のあまたあるにてあるゝとゝ。いでやハ。さらばもさていとも言詞なり

われを思ふ人をすゝもはぬ報にわわが思ふ人の我をあしはぬ。

公任卿の和哥九品の中に此哥を出して上品あるなり、といへり。此哥並に上の哥俤めきたる所を

之とうず、れいの中に入たれバよき事にこそあらめ。

一ち　ふがやゐ

思ひけん人をぞそに思はまさーやむくひなりけりや八

われを思ひけん人をもろともにおもハまものを。まさーやあゐ人をあいさりしむくひのなりけりやハ。むくひありて、今わが思ふ人のあひ思ハぬと、つらき人にあひて昔の事をくゆるなり、上に同じ

一ち　よみ人しらず

おてかゐん人をぞとゞめんずしなさに陳のかたにはなとひぬ哉

題注にはなひる事を古せり、其ハにて此事とかゐへきか、思案鼻ひるは万葉に出たり、こゐ人にあはんとて鼻ひるといへり、こゝの事こゐる人の涙をとゝ(ひる)ときていねしせずおてゆくゆゑに、これをとゝめんずしなければ、と有りの人の鼻をひバ、といまゐ事もやあんとせ、これは古のハなれバみづから鼻ひてはせんなくて他人のはなひるを用ゐなん。

紅にそめし心なるべし。人をあくにはうつるてふなり。

紅にそめしかハかく思ひ事を紅の衣にかけていつり。あくなる庚汁也。それを飽によせたり。紅の色は庚汁にさやかてうつろひやすし也。この人をあくにうつることを他と世す。

いとはるゝ我身ハ春の駒なれやかいかてらにはあれちすてつる

野注に馬をも牛をもはなちこわをバ野飼と云。それによせて人を思ひはなつものがたとえ也。この心

なれば。さのみハけしくたつにもあらぬハ。かゝりて

まなるものゆゑ野飼かてらと云心にあり。この

所他なるて

爲のこそぬやどりのゑるまとや我身人のつゆなかるゝ

あるすゝ人にふるさるゝによせたり。共歌他いかん

さめしらに夏ゝ人ねさゝの葉のさやく霜夜をわかいとりゆる。

さめしらは俗にかしこたでといふに似たり。其夜をひとりぬるもそもに

ぬるゝ人なきゆゑなり。それを

かしこそうに人まねしてあつさに独りあるやうにもてなしたるか、のこのそのさむき夜とひとりいねてはだの寒きも也、人にふるまはれたるか、又は思ひどかなりあるよりあるなり。夏は人まねといふる仏なるべし

夏衣

平中興

逢事の今はつゆに成ぬれば夜ふかゝらでは月なりけり

紫雅抄にあるもの今はは つゆを世日にいひなして。

夜ふかゝらでは月を待らえぬいつくしに思ひなそらへてよあり、こゝもつきなきを月なきにもたせたるが仏なるべし

たのむかいまうちきゝそ　これは　知恩院

もろこしのもの、山にもるもおくゆんと思ふなるらなくに

伏哥い仲平の伊勢が大和にゆきたる時になくさめて遣らむとて哥とゝ。

吉野山かもろこしにありもそ尋行んとて、それを唐にもの山あるやうにいふる仏なるべし

ながき

雲はれぬあさまの山のあさましや人の心をみてこそや
まめ

第雅抄に雲の晴やらぬあさまの山にすせてわすれず
しの夜あとゝふ事のあさましや。人の心はいかならん
と見てこそやまあつすハやまじといへり。坊主の俳
いづくならん。思葉に奇ハ男の心のあさはかなるを
そしれり。見てこそのて文字置るをよしとす。かゝ
るあさましき心のおくを見るにあはれと之。見ずして
といわんなに。上の五文字に雲はれぬと置たり。坊
主悪にあきらず

雑ぼなるなかゝの柄をつくる之今ハ我身をなに、
たとへん　　伊坊

世の中にふりぬるものはつのくにのなかゝの柄とぬ
となりけりとあるをそとりてふり。此柄いふたる
とゝるは用ひたり。うてまた柄のかたあるゆへ
にものにもなぞらへゆゑ之。今ハつきはてゝ柄の跡
もなけれハあゝ身のふりたるをたとへきものなと
ぬり、ふりぬるとよみきたれる柄を尽るとある
似とす。つくるを造ると之て雑もきこゆれ共、そ

れにてい事す一節あもしろかず

まあなれどなにそいよけくかるかやの乱れてまれどあ

けくもな

まあなれどいい事実なれどいえ石乙。哥の心を仏と

せるか、作者の意は世の是非のさかさまなる事の多

きをいきどほりてよあり。史記伯夷傳のこゝろなり

何かそのなのたつこゝろの惜かんしりてまどわは我ひ

とりかい

まどおとハ女色にまどふなり。万葉にたをやめの惑

ひといへり。哥心まどひをしらねばさんめたなし

知なれ、惑おなれバ木れもよく心えてするなり、世

くハ何そ名の立事をあるまんや、名の立すをみま

ばまどいぬこそなれと也、世惑ハ善ひとりをと思

ひて悔みか、世中の人多くめせなればつゝしむ

き事ゝとよあるなり

いとこ成けるあとこによそへて人のいひけれバ

くそ　屋ハ源氏が女之

よそながら我身にいとのよるといつばたゞいつはりにす

くばり也。

よそながらそは他人にして之、わが身にいとのとる
といへばとは、いとこによそへていふをいとのよ
うによせたり。いとこにもあぬ人のいとこなるお
とこによそへていふ事は、たゝ偽りにすくのみなるを
いふ事を針にすくとよせたり、すくといふなる心
なくて色このみなるをいへり、いとのするといふる
他なん、さて身にあやまちなれば人のいかにい
ふ共くるしからぬなり、いつはりにすくは底の結す
げてといふる糸と同じ、針に糸をとほすを云之、いと

この云ふと云ハ云ハ偽をかくると思ひすくすと、
といへるか

題しらず　さぬき　安倍清行が女之

ねぎことをさのみ聞けんやしろこそはてはなげきの杜
と成なあ

ねぎことハ神にいのりねがふ言之。さ水のみハさはが
りと云がし、なげきの杜ハ大陽にありて云、此事
ハ讃岐が我身の上を云にはあらで、よそのなるの心
よいくて人のねぎことをきく事のかさなりてハら
みなをせそなけきをいへるか。言がらを以て仰

とすべし、あくまれば女子の戒とすべし

大輔　慎あすくかず

なげきこるゆとしたかく成ぬればつらつゑのみそまづつのゝけるなげきのきをあにしてこゝろいみ、こゝはゆゑ、つらつゑは杖ゑ、今はほう杖と云、薪などを負ひ行ものいくるしき時は杖をつきてはるを今こゝをいきつゑと云ゑ、人の物あもゝ時手にてほうをさゝへてつくゝとのるすゑ、薪など負ふものゝ多く居る時杖にてやすゝこゝ、われもこのなげきのくるしさにたゞほう杖のみつくとゑ、これを佛とすべし。

よみ人しらず

なげきをばこりのみつみて是曳の山のかひなく成ぬべら也。

山に峠あれバあれなくとつけ侍り、上の哥の詞をつくすゆゑにつけたり、さ哥上の一首の紀きといはゝ人に在て後のなげきゑ、其ものあらハれて居紀つとかゝを得ん事をなげくが、又い姫姫などして世人のたなくなげくかなり、此哥かひなくなりぬべら

ことゝいへるは、ことあらはして身をかたはとなり、
身をほろびなんと伊勢物語にいへることゝき也。山の
あひなくとゝいへる言葉なるべきか
人ゝあることをもにとになひもてあつかなきをいと
ゝりけり
あふこいの道つ事ゝ、又逢つ期ともいつり、逢なの言
を用ゆる例しまゝあれば、さもみるべし。あれに物と
になひもつあつかことをそへたり、あふこいの字捺の
字なり。人をところいを重荷のごとくなして
物なくてもたわずといふは恵のとけめをえて、重荷

と云ヒ物といへるが佛なり
見よ
ひのまにゝてゝ入ゆるみかの月のわれて物思ふころに
も有ける
われてもの思ふは思ひの甚しき也、三日月はよひの
る西の方にわづかのるみえてやがてくるゝ夕思ふ
人によそへて之ずはのくはあしゝ、なまじひにちら
とゝゝゆゑ、われくだけ思ふゝ。三日月もわれたる
ごとくゝゆゑゆゝ思ふくつゝいけたり、佛はしらず
そ一にとてとすれバかゝりあくすれはあないひしらず
あふきまるまに

第雅樹にさぞとてとすれば、かいりくすればあないしらず、あらこそするわざあなと、これにて事の大意はきこえたり。この事ず雅の事なり、式部のまし〻歌論しいかいあもはれりん註せられず、如事の外之仮名はあ詞之、あないしらずハ言葉もおよばぬとうすと。あのさきさあなたこなたと、詩経の左右采之をあよさきるさにこれをとるとおくよみ事れり、とすればかいりとあさきるさとは似たる事にて別之、とのくと云ひ、とまれのくまれなどいお云と一つにて、言の本をとけばといふ解之、とくを云ふが

くいかいる之、結おに成り、こゝもときてみれば又かいりむすぼる之、のいりむすべばまたとくる之、とすればかいりのくすればとミつる詞を設て、ときつかけつ、之あけつときつするを云之。あく種になることの左右より取りつどあと之、のく説をつくれば此之へにとてい副の字のにて事の種くにいやかにそハりあすなるとみて之通ず一し せるの是此のむつのさをよある事之、仏はいかがしり難し。

世の中のうきたびことに身をなげいぬ深き谷にそ

あさく成所あ

うき事の切なれハ身を分けもなげ人と思われのこ、
又世にすむ人に恋のなきくてなれば人ごとに身と
なげハ分もうきりてあさくなんとこ、世のうきつ中に
をりて人の道を行なよ〻り事にこそ、人の死骸にて
分のあさくなるんとこか仏なり

在原もとかた

在の中ハいかにらるしを思うんこゝらの人にうら思ら
れば

貴賤男女都鄙にかぎらず、世の中ハうきものとてらら
みらるゝ世の中ハいかばかり人にいたてらるゝ

をくるしく思ふうんとこ、此身も上の事と同じく、
世の人の理に違せずして益きもなりにふるをいま
しめたり、世中に心をもたせたるか仏こ、大抵世中
ハ人をうれへしめず、人目ら恋るとこゝろ、へきる
也、

よみ人しらず

なにをして身の徒に老ぬらん年の思ハんことぞやさし
き

業雅やさしきり恥ありきなり、やさしとやつさしと
いへるか、易の者、学とやつさしとふまくあり

此夢又年にいとゝもたせたるを佛とす

あきかせ

みはすていはさだにもはふらさじつゐにはいかゞなるとしるべく

はふらさじは淫の字をよあり、しのゝ多くて外へなれ出る之、礼儀をもすてゝ心の放ち出る之、今も物をすつる事をはふるといふ之、夢の心無風もとより微妙(びくゝん)なるを、それをも絆(ほだし)したれば、身に衣冠をつくる事となれば身をすつると云へり、身はすてゝ世なれとゝもいなりともすてず礼儀を守るべき事之。

もしはそもすてたらば終りはいかなるよあらぬ人となんもしられず、はをすてはあらずんば終りの人がゝいかんと云るの今より知らるとて、此夢をあらはひて見れば無凡は有德の人なるべし、自餘の哥はいかなる名哥をすみても夢の上手はしらるゝと其人がらはしられず、古語に其詩をよみて其人をしるといかゝ云べき、身をすつるといいふべくはすてはみるといふ事にたゞけれはこれを佛とす。

ケさと

しら雲のもにわが身はありぬれど心はきえぬ物にそ

有ける

年すゝ共心は若き時のまゝとゝ心を消ぬとゝ（へ）り。心の消ぬとゝ仏なる（へ）

題しらす　　よみ人しらす

梅花さきてのゝ後の身なれはやすきものとのみ人のいふらん

伊勢物語に云ふこのみのすきものとゝ（へ）り。すきをいはんとて梅を云出せる之、みをいハんとてさきてのゝ後とゝ（へ）り、身に梅の実をそへたり。梅の実ハはのすきゆゑすきとうけたり、是のハはせの人の我を

色好ゝのすきものとゝいふはゝあやまりの之、されとも人のさゝふることゝ（へ）り之、是ハ年たけて文をなて花にゝいはゝ花はちりすぎて実のなるごゝろなれはすきものとゝいふもことわりあるゆゑと感ていへる之、

誠にすゝ仏なる（へ）

清原にしかいにおはすまたりける日、さゝ山のかひにさけふとゝいふを題にてよませ給ふける

みつね

峡の一字にて山のかひとよむ之。山と山とのあをゝ、唐詩に巫峡猿啼数行淚とあり、よませ給ふいよ

まめ玉なる、け詞書ハ前に曳之乃鶴立洲といふ題
にてよまれし時と見へたり。こゝの題猿
叫峽なれバ三字づゝの對せる題とみえたり、此時
世に文字の行はれける時ゆゑ、題も風流にて文字と
よゝ後世の題は文言なるが多し。
わびしらにましらなきそ是国の山のかひあるけふ
にやいあゝぬ
わびしらにましらなきそ法皇の御幸なれバ山
のかひあるけふにていなきめとなり。常雅卿古来詩
に猿聲いのなくして人のきゝて淚と俗まと作るゆ

ゑ、それをうけてあくこゝてまつこばしく作りなすな
り。わびしらいわびしくゝ、わびしらにましらとい
へる言のおもしきを例とす、ましらい猿の一名な
り。

よみ人しらず

世をいとひこの山とこゝに立まりてうつゝそめの
あくのきめゝ

大和物語をとゝれば此夢ハ廻照がある事なり、點照
の註にあくがぬをゝしにてそむる事を木のもとにう
つゝそめとつけたり、うるはしく帯なとゝき

てあとのきにうもそばさまにも相すしてまろわにする
はうつおしにもねらるる事なればうつおしもあと云
こゝ、愚案に出家は同じ所に三宿せず。林下石上と
坐とすれば、あの下ゞとに立よりしゝり。大和物
語の人のもとに家の出あるひにやるとて、それ
ゆゑあきのあなたとついけたるこゝろこゝ、うつお
しといふ詞の仏となれるか

元禄十年丁丑秋八月廿三日　東花坊解

文明二年寅孟春

大坂書林　荒木佐兵衛

京都書林　梅村宗五郎

江戸書林　山崎金兵衛

十行 廿四字詰